

県工同窓会・東京支部の活動「アイデンティティ」

1 県工同窓会・東京支部の変遷

(1) 東京支部の創設と歴史変遷

県工同窓会・東京支部を歴史的にさかのぼると、1948年(昭和23年)に県立信夫高等学校が創設され、1957年(昭和32年)には県立工業高等学校へ改名され、その2年後の1959年に井上幸夫氏が、県工同窓会・東京支部の初代支部長として総会を開催している。当時の同窓会総会は、毎年開催ではなく時期を適宜選んで開催されたと推測される。2000年ごろからは総会開催の付加価値として高名施設の見学会などのイベントを加えることによって盛況な総会が毎年度開催されるようになった。東京支部には半世紀の歴史が刻まれている。

県工同窓会の全会員数は約24,000名とされている。毎年卒業生が同窓会員に登録されるのは約250名、このうち東京関東圏への就職者は毎年約15名とされている。東京支部の会員数は2007年までは約300名が登録されていたが、2008年に音信が確認される会員を有効会員とし約170名が登録されて現在に至っている。東京支部の総会への出席者は毎年約30名。東京支部の運営は役員組織16名で実施されている。東京支部の初代支部長から数え現在の長谷川富士夫支部長は第12代目である。【東京支部の沿革を添付資料に示す】

(2) 東京支部創設の背景

県工同窓会に東京支部が創設された背景は、県工OBたちが故郷を離れ、東京圏で戦後の荒廃した経済社会のなかを、わき目もふらず一心不乱に企業活動に専念し、経済社会の貧困から抜け出し始め、少しずつ余裕ができた時期(1960年代)である。そこで同郷・同窓の仲間の絆を呼び戻したい機運が生まれたと推測される。そして、東京・関東圏の企業で活躍してきた県工OBたちがその実績や信頼度などから、母校卒業生の就職活動への支援の役割を果たしたい願望もあったと考えられる。また、県工母校が、県工同窓会の組織を日本の経済社会の中心である東京へ同窓会支部を置くことに、ある種のステータスがあったものと考えられる。

2 東京支部のアイデンティティ

東京支部の会員たちは、地元故郷を飛び出し、親元から遠く離れ、北は北海道、南は九州など全国から集まった群衆と共に東京関東圏の企業活動に専念した。戦後乏しい経済社会の中で、苦悩を克服しながら豊かさを求め競争することが労働力となり、原動力になって高度経済成長を成し遂げた。その成果が日本の国民総生産(GNP)を世界のトップレベルまで高めることが出来たのである。東京支部の会員たちは、このように世界有数の経済大国を築きあげたことに直接的、間接的に貢献したことに自負心を持ち続けている。この高度経済社会の達成によって、都市機能を拡大させ、情報化社会のテクノロジーを高度化し、デジタル化、AI(人工知能)、モータリゼーションの進化など目まぐるしいスピードで進化脈動している。東京支部の会員たちは、こうした高度に進化した都市機能の東京関東圏で安定した都市生活を堪能している。

3 東京支部の同窓会活動

(1)東京支部の総会開催

県工同窓会・東京支部は、2000年ごろから総会・イベント・親睦会を年次開催し、活発な活動が展開されるようになった。経済社会が安定し、生活に豊かさが実感できるようになり、インターネット、携帯電話など情報化社会の展開が始まった時期である。総会のイベントにはフジテレビの見学から始まって、JAL 整備工場、筑波 JAXA、NHK 放送博物館などを組み合わせた総会・親睦会は好評を得た。2010 年には同窓会の名称をより親しみを強調した愛称「県工東京倶楽部」を定めた。2011年は東日本大震災のため総会を自粛したが毎年度開催してきた。

総会への出席者はほぼ毎年30名を越え、同窓会本部から来賓をお迎えて開催を続けている。2019年には、イベントの見学会の趣向を変え、県工 OB が国際的な活躍する講師による講演会を開催、エベレスト登頂への挑戦を視聴した。総会の他に会員たちで楽しむハイキングを開催したが役員のみ参加が多く会員の参加は少なかった。2020年には新型コロナウイルス感染世界的にまん延し、3年にわたって総会・親睦会の開催が中止された。2023年にようやくコロナ禍が遠のいたので総会・親睦会・イベント計画を進められているが、この3年間のブランクは、総会への会員の参集趣向に少なからず影響すると考えられる。

(2)東京支部の運営と役員会

東京支部の運営は、役員16名で組織し、7～8名が中心になって年間スケジュールにより役員会を5～6回開催している。主な会議の内容は総会・イベント・懇親会を議題とした会議である。東京支部の運営資金は会員の年会費1,000円、約90名分と本部からの活動支援金15万円により運用されている。支出の多くは、総会・親睦会に係る費用である。総会・親睦会の際は当日出席者の会費3,000円を徴収している。役員会の交通費の半額は自己負担、役員会の会食費は当然全額自己負担である。役員会の多くは「東京ガス四谷クラブ」で開催してきた。

東京支部の総会・懇親会の多くも東京ガス四谷クラブにて開催してきた。東京ガス OB の安斎秋雄幹事により便宜利用することが出来た。この施設は東京ガスの福利厚生施設で、宴会場、会議室や娯楽室が完備されており、有用利用することが出来た。しかし、2022年に東京ガス四谷クラブが閉鎖された。現在は都内の貸し会議室を利用して役員会を開催している。

(3)広報活動

東京支部の広報活動は、ホームページ、会員メーリング、同窓会報への投稿がある。ホームページはインターネットが普及した直後から開設され、2012年には新たなデザインに刷新し、お知らせ、活動報告、会員レポートなどの6ページで構成して発信している。このホームページには東京支部が活動してきた多くの記録が集約されている。適宜更新して配信しているが、更新情報量が乏しく活性化が必要である。会員メーリングは約60名のアドレス登録者に対して適宜配信しているが配信頻度は少ない。同窓会報への投稿は、東京便りと卒業生へのメッセージを毎年度掲載している。東京支部のホームページ:<https://kenko-tokyo.net/>

(4)東京支部会員の卒業学科分布と年齢分布

東京支部会員の卒業学科について会員名簿登録者の173名を分類すると、機械科卒:59名(34.3%)、電子科卒:32名(18.6%)、電気科と建築科卒:27名(15.7%)、工業化学科卒:23名(13.4%)、精密機械科卒:4名(2.3%)、普通科卒:1名である。

年齢の分布は、65歳以下:13名(7.6%)、66～70歳:26名(15.1%)、71～75歳:40名(23.2%)、76～80歳:48名(28.0%)、81～85歳:35名(20.5%)、86～90歳:10名(5.8%)である。66歳から82歳までの会員が多くを占め、その中心は75歳代の団塊の世代が占めており、80歳代の戦後世代も健在している。

(5)同窓会本部との連携

母校や同窓会本部と東京支部との連携では、2005年に県工がサッカー全国大会に出場した際、東京支部が応援旗をもって応援を行った。また、2007年と2010年に県工がバスケットボール全国大会に出場した際にも応援に駆け付けた。2011年の東日本大震災の際には東京支部会員からの義援金と同窓会本部の義援金と合わせて母校へ寄贈を行った。2017年には東京支部会員から絵画を母校へ寄贈。本部の理事会、総会、卒業生の同窓会入会式には、東京支部から毎年出席している。県工創立記念式典へも出席し、東京支部長歴任者が表彰を受けた。同窓会本部から東京支部へは活動支援金が毎年度支給され主要活動に運用されている。東京支部総会・親睦会には毎年度、同窓会名誉会長(校長)、同窓会正副会長、同窓会事務局長など来賓としてお迎えし、母校の活動状況や東京支部情報などの情報交流・思疎通を図っている。

4 東京支部の課題

(1)会員の減少と増員活動

東京支部の当初の会員名簿は、同窓会本部が発行している同窓会会員名簿の情報から編集して作成されたものと推測される。2007年までの会員数は304名が登録された。2008年には音信が有効な会員183名に縮小登録し、その10年後の2018年には148名に減少した。東京支部は会員の増員対策が大きな課題となり、会員を増やす努力は役員会で様々な検討を重ねて実施してきた。総会案内の際に手書きのメモで出席勧誘、クラス会の友人へ電話で呼びかけなど実施し、若干の増員を得たが、顕著な増加は見られなかった。2019年には同窓会本部にお願いして、同窓会会報の配送に便乗して東京圏の同窓生宛へ東京支部の総会案内を添付し配信された。その結果、約30名から音信があり会員登録した。この方法は会員登録増加に有効であったが、総会への参加意思は希薄であった。現在の会員数は173名である。

(2)会員減少の要因

会員減少の要因は、個人情報保護法(2005年)制定により会員の住所や電話番号など個人情報情報がクローズされ、会員勧誘活動が制限された。また、高年齢者雇用安定法(2013年)により企業の定年延長制が導入され、働き続け、同窓会への趣向が希薄になっている。高齢化による退会会員の増加。時代の流れとして戦後世代から団塊の世代への移行、情報化社会の SNS

コミュニティやスポーツ・レジャーの多様化などで、集団で楽しむ趣向から、独自の価値観で自己中心に楽しむ趣向への大きな潮流の変化があり、同窓会への趣向が希薄になっている。

(3)東京支部の「支会」の衰退

東京支部の下部組織である「支会」は、企業内部や同級会などで構成され、東京支部にも10数の「支会」が組織された。支会発足当時は盛んに活動されたと推測されるが、10数年前に活動状況を確認した結果、形骸化し、名ばかりの支会が散見され、2支会(しのぶ七夕会、新日鉄支会)に減少した。この2支会も活動が会員の高齢化などで、近々支会運営の停止が懸念されている。支会を存続する「魅力」が欠乏している。支会の空洞化は東京支部の会員減少速度よりも顕著に進行している。ここにも、前述した会員減少要因である、集団で楽しむ趣向から、自己中心に楽しむ趣向への大きな潮流が根底にあると考えられる。

(4)会員増加への要因(ハーディング効果)

同窓会を開設して運営を続けようとする動機には、同窓会そのものが古来、長い歴史があって社会に広く定着しており社会通念として同窓生の絆、居場所を構成することが慣例になっており、義務的・事務的に創設運営される。義務的な同窓会の運営に加え、もう一つの運営要因として、人間が集まって行動する本能が強く作用している。その人間が集まって行動する本能的には「ハーディング効果(Herding effect)」と言う。ハーディング効果の要素としては、「魅力、絆、共通感、一体感、友だち感、助け合い、安心感、快さ、居心地の良さ」などが作用して人間が集まって行動する。同窓会にもこのハーディング効果が作用しており、東京支部では、青春時代に県工で3年間の学業を過ごしたことの共通感、一体感、絆などのハーディング効果が強く作用している。更に、同窓会の義務的な要素も根強く、長年にわたって継続運営されている。

「魅力」があるところには自然に人々は集まる。同窓会への参集要因にはこの「魅力」が大変重要である。一般的に、同窓会というキーワードに対しては「絆」、「共通感」の面では根強い居心地を感じられるが、「魅力」の面では必ずしも十分ではないと考えられる。更に、前述したように集団趣向から独自の価値観で自己中心趣向への大きな時代の潮流が影響しており、同窓会への趣向の希薄化が感じられる。多くの社会的事象・現象からも「魅力な少なく」、時代の流れに適合せず「物足りなさ」を感じるころには「空洞化」が生じて衰退化が生じることが明らかである。同窓会の運営には新たな「魅力」を感じる運用が求められる。

【あとがき】

本稿を編集した目的は、県工東京支部・同窓会の会員の年齢層が、戦後世代から団塊の世代中心へ移行しており、同窓会の運営・役員も戦後世代から団塊の世代へ引き継がなければならない。本稿が引継ぎ資料の一端になれば幸いであるとの思いで編集した。

東京支部・同窓会は会員減少化への問題に直面している。解決策には多くの難問が潜んでいるので、本稿では、問題の分析と会員の増員要因キーワードを述べるにとどめ、その具体的な問題解決のための対策については別の機会に検討されるものとした。

邦暦（西暦）	歴代東京支部長	■:県工母校関連、◎:東京支部総会	歴史的背景
昭和 25 年 (1950)		<ul style="list-style-type: none"> ■ 県立信夫高校創設 (1948) ■ 同窓会会則施行 (1952) ■ 校歌、校旗、校章制定 (1953) ■ 県立福島工業高校に改名 (1957) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 終戦・原爆投下 (1945) ● NHK テレビ放送開始 (1952)
昭和 35 年 (1960)	井上幸夫 (1959~1963)	<ul style="list-style-type: none"> ◎34~36 総会 (石川台公民館) ■ 県工創立 20 周年 (1968) 新校舎落成 	<ul style="list-style-type: none"> ● ソ連人工衛星 (1957) ● 所得倍増計画 (1960) ● 東京オリンピック (1964)
昭和 45 年 (1970)	鹿野八郎 (1969~1974)		<ul style="list-style-type: none"> ● 日本経済世界 2 位 (1968) ● 米アポロ月面着陸 (1969) ● 第 1 次石油ショック (1973)
昭和 55 年 (1980)	松野昭夫 (1975~1978)	<ul style="list-style-type: none"> ◎53 総会 (墨田公民館) ■ 県工創立 30 周年 (1978) ◎56 総会 (北千住葵会館) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 第 2 次石油ショック (1979) ● スリーマイル島原発事故 (1979)
平成 2 年 (1990)	鈴木和男 (1979~1997)	<ul style="list-style-type: none"> ◎63 総会 (上野・北京飯店) ■ 県工創立 40 周年 (1988) ■ 県工校舎大規模改造 (1996) 	<ul style="list-style-type: none"> ● チェルノブエリ原発事故 (1986) ● ベルリン壁崩壊 (1989) ● バブル景気崩壊 (1990) ● 阪神淡路大震災 (1995)
平成 12 年 (2000)	鈴木八郎 (1998~2000)	<ul style="list-style-type: none"> ◎09 総会 (上野・福島会館) ◎10 総会 (上野・福島会館) ◎11 総会 (上野・福島会館) ■ 県工創立 50 周年 (1998) ■ いぶき会館落成 (2000) 	<ul style="list-style-type: none"> ● インターネット普及 (1999) ● 携帯電話普及 (2000)
	菅野定夫 (2001~2004)	<ul style="list-style-type: none"> ◎12 総会 (上野・福島会館) ◎13 総会 (フジテレビ) ◎14 総会 (福島・うぶかの郷) ◎15 総会 (鎌倉・江の島) ◎16 総会 (羽田 JAL 新整備工場) ◎17 総会 (三菱みなとみらい館) ◎18 総会 (那須高原湯本温泉) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 米同時多発テロ (2001) ● イラク戦争勃発 (2003)
	安斎秋雄 (2005~2009)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 県工創立 60 周年 (2008) ◎19 総会 (JFE 鋼板千葉製造所) ◎20 総会 (皇居東御苑) ◎21 総会 (筑波・宇宙センター) 	<ul style="list-style-type: none"> ● リーマンショック (2008) ● 世界同時不況 (2009)
平成 22 年 (2010)	山田幸祐 (2010~2011)	<ul style="list-style-type: none"> ◎22 総会 (大宮・鉄道博物館) 愛称「県工東京倶楽部」設定 ◎23 総会自粛 (東日本大震災) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 東日本大震災・M9・巨大津波 福島第 1 原発事故 (2011)
	山崎忠弘 (2012~2014)	<ul style="list-style-type: none"> ◎24 総会 (NHK 放送博物館) ◎25 総会 (上野・国立科学博物館) 	

平成 27 年
(2015)

斎藤活夫
(2015~2017)

◎26 総会 (先端技術館 TEPIA)
◎27 総会 (東芝未来科学館)
◎28 総会 (貨幣博物館)

●熊本地震・M7.3 (2016)

目黒仁一
(2018~2020)

◎29 総会 (江戸東京博物館)
◎30 総会 (消防博物館)
■県工創立 70 周年 (2018)

●米・朝首脳初会談 (2018)

令和 2 年
(2020)

長谷川富士夫
(2021~)

◎1 総会 (尾形好雄氏・講演会)
◎2 総会自粛 (新型コロナ対策)
◎3 総会自粛 (新型コロナ対策)
◎4 総会自粛 (新型コロナ対策)

●新型コロナ感染拡大 (2020)

●ソ連、ウクライナ侵略 (2022)

対数目盛

